

[左から]

河合正人氏

京都の老舗生花店で修業後、1986年「河合正人花事務所」を設立。本業であるフラワーコーディネーターのかたわら、ファッション関係の書籍のプロデュース、編集、プロモーションを行う。

穂積和夫氏

1960年代よりファッションイラストを男性誌に寄稿し、第一人者として活躍。車や日本の古建築のイラストも手がける。85歳にしてダンディぶりは健在。

中野香織氏

ケンブリッジ大学客員教授などを経て、2008年より明治大学国際日本学部特任教授。専門はファッション文化史やダンディズム。著書に「ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち」(新潮選書)など。

ケン青木氏

日系アパレルメーカーの米国法人代表を経て、現在は注文服をベースにしたコンサルティングを行うかたわら、新聞やウェブ等で紳士服に関するコラムを執筆。ニューヨーク在住21年。

日本のダンディズムを語ろう！
Pride of the Japanese Dandy

「ジャパニーズ・ダンディ」 という矜持

世代や職種を超えて、一般男性130人が自前のスーツやジャケットを着て登場するポートレート写真集「JAPANESE DANDY」が刊行された。
メンズファッションに詳しい4人の賢者が日本で培われたダンディズムを語る。

独自の服飾文化として定着した 日本人のテーラードスタイル

河合 この本を出版しようと思ったきっかけですが、そもそも日本には、一般男性のポートレート写真集というものが少ない。しかもテーラードを切り口にしたものは、ほぼ皆無でした。そこで、私の周りにはスタイルのある男性たちをモデルに、写真を撮りためていこうと考えたのです。カジュアル全盛の時代だからこそ、テーラードスタイルに一度スポットを当て、日本にもこういう男性たちがいたことを記録しておかなければという思いもありました。

中野 政府がクールジャパン戦略を打ち出してから約5年。これまでは「アニメ」や「カワイイ」がメインコンテンツだったなかで、「JAPANESE DANDY」は誰も予想しなかったクールジャパンのひとつの発露でした。でも歴史を振り返ると、日本人が洋装を始めてから約140年。いまではすっかり、自分たちの服装文化として定着しました。この本に収められている130人のポートレートから、そのことがはっきりと見て取れるはず。この本を通じて、ジャパニーズ・ダンディが世界から注目を集めるのではないのでしょうか。

穂積 装う楽しみというものは、いくつになってもなくなりません。僕の若い頃はアイビー全盛の時代でしたから、いままトラッドスタイルが好きですね。スーツにはオーダーという嗜みもありますが、より気軽に楽しめる既製服をつくった国はアメリカでした。日本のスーツは、そんなふうには選択肢が多様であることも魅力としてありますね。

中野 この本には、一般の方たちが自前の服で登場しているからこそリアリティがあり、人それぞれ体型も異なっているからこそスタイルブックとして参考になるんです。

青木 スーツはたしかにビジネスマンの制服という役割もあるかもしれませんが、ニューヨークをはじめ欧米の都市では自己表現の手段として、独自の着こなしを楽しんでいる人が多いですね。そして仕事を引退しても、ジャケットを着て革靴を履く。ゆとりの時間を使って、奥様とどんどん外出するのです。ジャパニーズ・ダンディにも、そんなライフスタイルが浸透してきたのではないのでしょうか。

河合 そうですね。スーツには、楽しむために着るというお洒落着としての側面もあるのですから。

青木 いまニューヨークでは、クールジャパンがあらゆる分野で注目されています。先日はセントラルステーションに日本の「デパ地下」が再現されて、話題になりました。マンハッタンの本屋には日本のメンズファッション誌が並んでいて、ビジネスマンが文字は読めなくても写真を見て参考にしています。これからは、世界の男性たちが日本に服を買いに来るかもしれません。

穂積 一方で、日本には着物の文化もあります。面白いことに、着物を着ると立ち居振る舞いや所作まで変わるんです。でも色や柄の合わせ方でいうと、実は洋服も着物も同じようなものなんです。僕は着物でよくパーティにも行きます。

中野 素敵ですね。日本人がスーツと着物の両方をスマートに着こなせたら、もう海外の人たちには太刀打ちできませんからね（笑）。

河合 今回、130人の男性を撮影しましたが、ダンディとは見かけだけを表す言葉ではありません。その人の人生観や考え方を知って出演を交渉した人もいました。服を着る心意気、そこにダンディズムがあるというのが私の持論です。

青木 なるほど。アメリカではダンディという、実はキザな男のニュアンスが強い。以前の職場で、上司から「ダンディよりもグッドテイストをめざせ」と言われたことを思い出しました。

美意識や心構えを表現する ジャパニーズ・ダンディ

中野 スーツをお洒落に着こなす男性というのは、残念ながら一般の女性たちからは少々縁の遠い存在なんです。だからこそ、完成した本を見せたときに、リアルな人生を感じさせる一般の男性の堂々たるモデルぶりを、誰もが珍しがって喜んでいました。スーツ姿の色っぽさを、女性の読者に対してもいい形で知ってもらう機会になりました。

青木 欧米は、ご存じのように階級社会です。それに比べると、日本はもっとフラットで、この本にも世代や職種を超えたさまざまな男性たちが多様な着こなしで登場しています。そしてそこに見えてくるのが、階級を超えて存在する日本独特の美意識の高さであると思うんです。

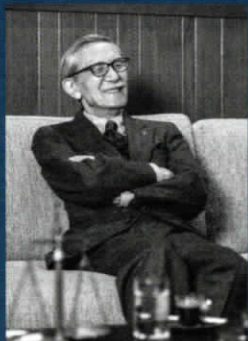
穂積 そう、日本では着道楽は階級など関係なく、誰もが楽しめるものですからね。

青木 そういった面も踏まえたうえで、相手にどう思われるか、相手にどう想いを伝えるかを着こなしで表現するのに長けている人が、ジャパニーズ・ダンディではないでしょうか。

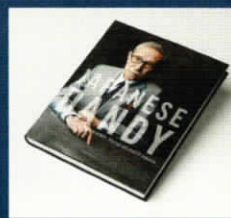
中野 周りの目を気にすることが、海外ではむしろ悪いように言われますが、私はそうは思いません。周囲を受け入れ、調和を図るという思慮を服装に表現できるのが、ジャパニーズ・ダンディの理想像ではないのでしょうか。

穂積 きちんとスーツを着ると、いい加減には歩けないわけですよ。少し気取って、背筋をしゃんとして歩いていると、心にも身体にもいい。そうした心構えも含めて、ジャパニーズ・ダンディのかくあるべき姿があるのではないのでしょうか。

河合 日本の男性は、「お洒落ですね」と言われると違和感を覚えるのに、「スタイルがあるね」と言われると喜ぶ人が多い。その人の個性が服にも表れたときに、それをダンディと呼ぶのではないのでしょうか。男が自分のスタイルをもつと、こんなにカッコよくなるんだということが、この本を通じてできるだけ多くの人たちに伝わればと願っています。



スーツを端正に着こなす穂積和夫氏。ファッションイラスト界の重鎮にして日本を代表するダンディだ。



『JAPANESE DANDY』

(万葉舎) 10,800円

プロデュース&ディレクション：河合正人

写真：大川直人

世代も職種も超えた市井の男性130人が登場する圧巻のポートレート集。

表紙はイラストレーターの穂積和夫氏。

メンズ館8階＝イセタンメンズレジデンス